

色彩名詞と色彩形容詞の対立

-- 新聞と文学のコーパスからわかること --

藤村逸子

名古屋大学大学院・国際開発研究科

1. はじめに

本研究で検討の対象とするのは、次の例に見られるような、色彩を表わす「名詞+の」と形容詞との対立である。

- (1) 青い空と白い雲を背景に、黄色いTシャツと黒いパンツを身に付けた山本さんが、赤いカーネーションを手に、青い顔をして立っている写真
- (2) *青の空と*白の雲を背景に、黄色のTシャツと黒のパンツを身に付けた山本さんが、赤のカーネーションを手に、*青の顔をして立っている写真

例1は自然な文である。例1に表れる色彩表現は全て、自然の風景の中にある人物を写す写真の描写として問題なく許容できる。一方、例2の「青の空」、「白の雲」、「青の顔」は不自然である。少なくとも、自然の風景の中の人物を表す描写としては許容することができない。敢えて解釈を試みるなら、コンピュータゲームに登場する青く塗られた顔のキャラクターなどが想像できる¹。この例はすでに、「色彩名詞+の」と色彩形容詞との違いが異なった指示対象に対応する可能性のあることを示唆しているといえる。

本研究の目的は、色彩名詞と色彩形容詞の意味の差異を記述し、差異が生まれるメカニズムを説明することである。名詞と形容詞が対立する「色」には、「白・黒・赤・青・黄色・茶色」があり、「白い vs 白の」、「黒い vs 黒の」、「赤い vs 赤の」、「青い vs 青の」、「黄色い vs 黄色の」、「茶色い vs 茶色の」の対立として実現する²。これらの名詞と形容詞は、言うまでもなく日本語の基礎語彙であり、使用頻度の高い重要な言語単位のはずである。ところがこの対立に関する先行研究はほとんど存在しない。筆者の知る限り、沢田奈保子(1992)がただ一つ存在するだけである。あとで紹介するように、沢田の研究では、名詞と

¹ 「青の顔」をインターネットで検索すると、実際にコンピュータゲームのキャラクターの説明としてヒットしたが、それは、顔の描かれた青色の爆弾のことであった。

青の顔のバクダンを入れると結構イヤな攻撃をしてるけど、まァノーダメで倒せるとおもう。
(http://hisya.hypermart.net/c_j05.html, 2003/01/28 現在)

² 厳密には、「黒色の・赤色の・白色の・青色の、黄の・茶の」も対立のパラダイムに入る。

形容詞の対立が情報伝達上の機能の違いにとらえられており、機能論的観点からの分析が試みられている。沢田の主張する対立が、色彩名詞と形容詞の間に存在するのは間違いないと思われる。しかし沢田の主張だけで、例文2の「青の空」、「白の雲」、「青の顔」がなぜ不自然なのかを説明することは困難である。

本研究はその理論的枠組みとして、色彩名詞と形容詞の対立を、品詞間の意味の対立ととらえる。すなわち、名詞であることの意味と形容詞であることの意味には違いがあると考える。結論から言うならば、その対立は「デジタル的な意味」と「アナログ的な意味」とでも呼ぶことのできる対立に相当すると考えている。色彩表現は本質的に、その指示対象に不安定さがつきまとうため、実際の使用の中では、コンテキストに条件づけられたさまざまな種類の意味効果が生じ、取り扱うのがむずかしい。ヴィトゲンシュタインの次の言葉が物語るように、色の問題を直感にたよった方法によって解明することは容易ではないし、数少ない用例に基づいて結論を導き出すのも危険である。

『「赤い」、「青い」、「黒い」、「白い」という言葉が何を意味しているのか』という問いに対してわれわれはもちろんすぐに、その色をしたものを指し示すことができる。しかし、われわれはこれらの語の意味をそれ以上説明することはできない！なぜならそのように指し示す以外には、それらの語の使用についてわれわれは何も思い浮かばないし、浮かんたとしてもきわめて曖昧で部分的に間違っただけ創造しかできないからである (ヴィトゲンシュタイン『色彩について』, p.41)。

本研究の方法論上の特徴は、大規模な電子化コーパスから得られた大量の実例に基づいて記述を行うということである³。本稿では最初の報告として、用例の数量的分析結果を提示し、色彩名詞と形容詞の対立を構成する要因を仮説として提案する。仮説の検証と、具体的な文脈における多様な意味効果の生成に関する議論は、別の稿に譲ることとする。

2では、先行研究の紹介として、色彩表現の研究、品詞の意味に関する研究、沢田(1992)の研究を紹介する。3では、本論で用いる言語資料とデータの概要に関して説明する。4では、色彩表現の実際の使用を数値的に把握し、対立を構成する要因を同定していく。

2. 先行研究

2.1. 色彩表現

色彩表現は、哲学・心理学・言語学などの学問分野において議論されてきた古典的なテーマである。自然界に色のスペクトルとして存在する連続体を、人間が言語を用いて分節し、カテゴリー化するその方法に、これまでの色彩表現の研究の力点は置かれてきた。ソ

³ フランスでは、大規模コーパスに基づいた「色の辞典」が1996年から刊行され始めた。1996年に「Le bleu(青)」、2000年に「Le rouge(赤)」、2002年に「Le rose(ピンク)」が、それぞれ、250ページから500ページに及ぶ大部の著作として出版されている。cf. Mollard-Desfour, Anne (1996, 2000, 2002)

シュールやサピア・ウォーフにさかのぼる言語相対性仮説（言語が人間の認知や思考を決定するという説）に対抗する研究としての Berlin & Kay (1969) がとくに有名である。Berlin & Kay は、言語の如何をとわず人間が行う色の認知には共通点があると言い、各言語にそなわった基本色彩語の数がいくつであろうと、それらの語の焦点となる色には言語を超えた普遍性があると論じた。また、各言語によって基本色彩語の数は異なろうとも、その発展の順序には人間の言語に共通した普遍性、すなわち含意的階層関係があるとし、言語ごとに異なるのは発展の段階の差であるという仮説を掲げた。ソシュールの構造主義的観点からすれば、色は他の色との対立によってネガティブにその価値が定まるものである。Berlin & Kay の認知主義的立場によれば、色は人間の認識のシステムに動機付けられた、ポジティブな価値があるということになる⁴。

このような背景の中、日本語においても色彩表現は、どの言語単位がどんな色に対応するのかという記号論・カテゴリー論の問題として議論されることが多かった。その結果、色彩表現はその語幹のみに注意が払われて、実際の発話で用いられる語の文法的形式や派生形式は、カテゴリーや意味とは無関係のものとして軽んじられてきたといえる。以下に代表的な例をいくつか挙げる。

柴田武 (1988) は、日本語の色彩表現に関する重要な論考である。その中では、「あか」、「あお」、「しろ」、「くろ」は、「民衆分類（できるだけ大まかの分類）」によって分類された基本色名として説明されている。しかし、現実の言語使用において大まかに色を示すために用いられるのは、名詞ではなく、複合語の一部（赤味噌、素人など）か、形容詞（赤い顔など）である。「あか」、「あお」、「しろ」、「くろ」と柴田が呼ぶのは、文法的には語幹なのであって、色彩名詞そのものではないが、その点に関する言及はない⁵。

鈴木孝夫 (1990) は、色のカテゴリーの恣意性について述べた文章の中で、フランス語の *jaune* に対応する「色」と日本語の「黄色」に対応する「色」には違いがあることを例として挙げているが、日本語の「黄色の」と「黄色い」は同一の色を表すと考えられているようである。

...des souliers jaunes つまり「黄色い靴」という表現に出会ったことにある。(中略) 日本では女ならばいざ知らず、男は芸人でもない限り、黄色の靴なぞ絶対に履かない。ところがこの小説の中では、ごく普通の勤め人が、黄色い靴を履いて死んでいたのである。(p.18)

さらに国立国語研究所 (1972) は、「色に関する形容詞のばあい、「あおい」「まっさおな」のような形容詞だけを取り上げて、「みどりの」「むらさきの」のような名詞を除外することは、意味の面からは不自然なことだと考えられるので、「(色を表わす名詞) + の」

⁴ 「色彩は、言語カテゴリーの恣意性を示すどころか、その逆で、「深層の知覚・認知要因が言語カテゴリーの形成と指示に影響を与える最良の例である。」(テイラー：1996, p17)

⁵ 同様に、日本語では緑は青の中に包含されるとよく言われるが、「青」という名詞が、緑を指して用いられる例は、調べた限りでは信号以外には存在しない。「青」が緑を指示するのは、「青い、青さ、青々と、青み」の各表現か、「青葉」などの複合語の要素であって「青」という名詞そのものではない。

の形まで含めて見わたすことにしたい。(p.80)」と言い、(a) しろい、くろい、あかい、あおい、(b) きいろい・な、みどり (いろ) の、ちやいろい・な・の、ももいろの、などを検討の対象にしている。しかし、「しろの」、「くろの」、「あかの」、「あおの」、「きいろの」は検討対象から除外されており、その理由は明らかにされていない。おそらく、形容詞とは意味がかなり違うと認識されてのことと推測できる。一方「ちやいろの」と「ちやいろい」は同じものとして扱われている。

2.2. 品詞の意味

このように語の形式を意味やカテゴリーの考察から除外する考え方は、言語学においてめずらしいものではない。言語学では一般に、品詞、すなわち文法的カテゴリーは、意味とは独立して定義すべきものと考えられている。確かに、意味の基準によって品詞を定義することは不可能であり、品詞の区別が形態・統語論的基準によってなされてきたことは明らかである。しかしだからと言って、品詞が意味と無関係であるというわけではない。

認知言語学や機能言語学は次のように、文法カテゴリーと意味のかかわりを主張してきた。Lagnacker (1987: p 189)は、名詞は典型的には「もの (THING)」を表わし、動詞は典型的には「時間的なプロセス(process)」を表わし、形容詞は「非時間的な関係(atemporel relation)」を表わすものであるという。Givón (1979:320) は、名詞と動詞の対立は、その指示対象の時間的な安定性の連続軸の上に存在する対立であると考え。典型的な名詞は、時空間を超えて存在する具体的な実体である。一方、動詞は連続軸の対極にあって、動作や出来事である場合が多く、時間の経過の中に存在する形のない実体である。形容詞は、名詞と動詞の間の中間的なものと考えられている。しかし、文法カテゴリーの全成員が共通の意味内容を持つと主張されているわけではない。文法カテゴリー間の意味の対立は、多くの場合、潜在的なものである。しかし偶然、対立のパラダイムが可能になった場合には顕在化し、観察することが可能になる。我々の扱う色彩表現は、その場合に当たると考えられる。

2.3. 沢田(1992)

色彩名詞と色彩形容詞の差異を扱った唯一の先行研究は、沢田(1992)である。「名詞の指定性と形容詞の限定性、描写性について一色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析から一」という題名の示すとおり、沢田は、名詞と形容詞の対立を、その情報伝達上の機能の対立ととらえて、名詞には「指定機能」があり、形容詞には「描写機能」と「限定機能」があるとし、この違いをもとに、色彩をあらわす名詞と形容詞の使い分けを論じている。名詞・形容詞が述語として用いられる場合に、色彩名詞は「指定機能」を果たして文は「同定文⁶」になり、形容詞の場合には「描写機能」を果たして、文が「記述文」になるという説明は、名詞と形容詞の対立の観点から自然に導き出すことができると思われる。しかし、名詞を修飾する場合(=「装定」)の使い分けに関しては、情報伝達の機能の違い(例文3、

⁶ 坂原(1990)などの用語。記述文も同様。

4) だけで全ての現象を説明することは難しい。色彩名詞は「指定機能」を果たさない場合にも使われることがあるし(例文5),「指定機能」が求められる文脈においても名詞の使用が不自然な場合も存在する(例文6)。

(3) その青のコップをとってください。(指定)
(青い)

(4) テーブルの上に青いコップが見えます。(描写)
(?青の)

(5) 母京子さん(27)は18日午後、家族や近所の人たちと初めて遺体発見現場を訪れた。黒の喪服姿の京子さんは、やつれ切った表情で終始無言だった。(毎日新聞1991)

(6) ??黒の毛は抜かないで。??白の毛だけを抜いてね。(頭髪の場合)
(黒い毛) (白い毛)

喪服の色は、日本語のコンテキストにおいては「黒」に決まっている。「白」やその他の色ではなく「黒の喪服」という選択が例文5においてなされていると解釈することはできない⁷。逆に例文6では、明らかに「黒」と「白」の間で色の選択があり、情報伝達上は「指定」が行われているが、人間の自然な頭髪を「黒の毛」や「白の毛」と言うのは不自然である。

3. 方法とデータの概要

以下では、利用したコーパス、対象として取り上げた用例の条件、用例の分類の方法、得られたデータの概要について順に述べる。

3.1. コーパス

本研究で利用したのは、以下の2つのコーパスである。

- 文学データ
「新潮文庫の100冊」のうち、1950年以降に発行されたもの42作品⁸。外国語からの翻訳作品と、田辺聖子「新源氏物語」は除く⁹。本文のみ。
/corpus/Shinchosha100/以下
ファイルサイズは合計19,024,917バイト:18.1MB
- 新聞データ
毎日新聞1999年の前半分

⁷ 又、沢田の言う、潜在的マルチプルチョイスも不可能である。

⁸ APPENDIX 1に作品名を挙げた。

⁹ 色彩表現の用い方が現代とはかけ離れていると判断したからである。平安期の文学作品では、衣服の色が、登場人物の身分・性格や、季節などを表わしていたらしい。cf. 井原昭(1988)

/corpus/mainichi/1999/mai99_aeuc.txt

ファイルサイズは 365.443.953 バイト

本研究の対象にしたのは、このファイルのうち、\T2\というタグの付与された記事本文からなる行である。記事本文のみの正確なファイルサイズは不明であるが、1999年全体の記事本文ファイル /corpus/mainichi/MainichiHonbun/1999Honbun.euc (117.703.511 バイト) のおよそ半分のはずなので、およそ 56.1MB と推定できる。

3.2. 取り扱った用例

次の3つの条件を備えた用例を研究の対象にした。

1. 形態的条件

「黒・赤（紅）・白・青・黄色・茶色」に、「い」と「の」が後続するもの¹⁰
「黒色の・赤（紅）色の・白色の・青色の、黄の」は含めなかった¹¹。

2. 意味的条件

色彩表現が、実際に「色」を表わしているもの

次のような例は実際の「色」を表わさないので検討の対象からは除外した。

a. 熟語：赤の他人，黄色い声，青い鳥など

b. メトニミー・メタファーによる拡張：

黒（犯人），赤（共産主義者）

黒，白（碁石：毎日新聞には囲碁コーナーがあり，多数出現）：黒の勝利，白の弱みなど

黒い憂鬱，青い観念的な嫌悪感，白い眠り，白い沈黙など

c. 固有名詞：赤の広場（地名），青の時代（ピカソの），黄色いリボン（映画の題名）など

d. メタ表現：黒い色，青，赤，黒の三色，黄と黒のタイガースカラー，緑は赤と青の中間の色で..など

e. 「信号が赤のまま・・・」10例¹²

f. コーパスの特徴に起因する問題：

コラムのタイトルなど：青い山脈（毎日新聞に多数出現）

3. 統語的条件

名詞と形容詞の交替に統語的制約のないもの

次の場合には、統語的制約によって形式が決定されるので、検討の対象から除外した。

a. 複合色彩形容詞・名詞：どす黒い，青白い，浅黒い，真っ白の，赤茶色の な

¹⁰ ひらがなの形（くろ，あか，しろ，あお，きいろ，ちやいろ）も検索したが，1例も見つからなかった。

¹¹ これらの例は，全体の1%程度とごくわずかである。

¹² データの中で，信号の色に関する例は，「信号が赤のまま・・・」のみであった。信号の色は，色彩表現の中では特殊であり，面白いが，今回の研究ではデータが存在しないため扱わない。

ど。

- b. 形容詞＋色彩名詞：深い青の，鮮やかな青の，黒ずんだ青の，鮮やかな赤の，淡い黄色の，鮮やかな黄色の，濃い茶色の，淡い茶色の
- c. 等位構造の色彩名詞：赤や黄色のミニトマト，茶と白の大きな渦，白，赤の葡萄酒，青と赤の戸室石，赤青黄のおはじき，など

3.3. 被修飾名詞の種類

冒頭の例が示すように，色彩名詞と色彩形容詞の選択には，被修飾名詞の意味特徴が関与していると考えられる。本研究の目的のためには，被修飾名詞を意味の基準に従って分類しておくことが必要である。試行錯誤の末，分類の基準としたのは次の5つである。なお被修飾名詞は，色彩表現の直後にくるものだけでなく不連続なものも対象にした¹³。

a. 自然（無着色のもの）：

人間，身体，環境，自然，植物，食物，材料，動物，肉体，火・影・光・闇を表わす名詞

例：顔，目，瞳，肌，歯，髪，唇，息，血，空，海，山，土，石，雲，雨，雪，岩，火，液体，しみ，虹，花，鳥，煙，影 など

b. 人造物・衣服（人工着色されたもの）：

衣服，人造物，灯を表わす名詞

例：シャツ，Tシャツ，ズボン，背広，服，帽子，セーター，スーツ，トレンチコート，ジャンパー，帯，紙，旗，壁，布，リボン，灯 など

c. 2 次元的形状

例：線，斑点，点，文字 など

d. 不定名詞

例：もの，の，部分，かたまり など

e. 着色剤

例：インク，ボールペン，染料 など

3.4. 手順

1. telnet 接続によってサーバにアクセスし，「黒い・赤（紅）い・白い・青い・黄色い・茶色い」，「黒の・赤（紅）の・白の・青の・黄色の・茶色の」を grep 検索した。
2. 得られた結果に整形を施した後，Microsoft Excel で読み込み，Excel のデータベース機能を使って手作業によって不要な例を排除し，被修飾名詞の意味情報などの必要な情報を付与してデータを整理した。

¹³ 次のような場合である。白い一枚の布，黒い細い棒，黒いねばねばした薬品，黒いロングのフレアスカート，黒いこんもりとした雑木林，白い小さな貝殻，白い細やかな十字型の花，白い里子の乳房，黄色のかわいいタンポポ，茶色の小さい葉っぱ，青の無地の衿

3.5. データの概観

以上の作業によって得た用例（全 2923 例）の概要は以下のとおりである。

3.5.1. 色の種類別の生起頻度

図 1 は、色彩形容詞と色彩名詞の色別の出現頻度を表わすグラフである¹⁴。

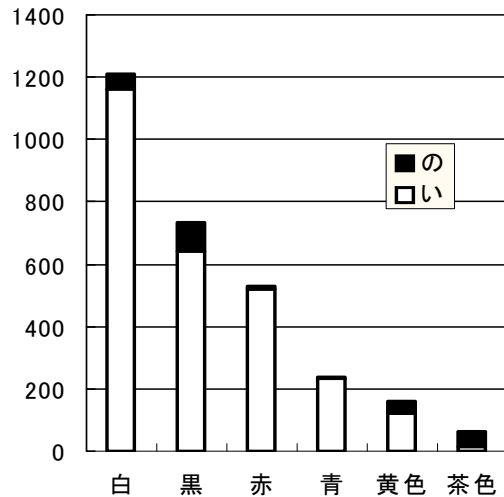


図 1：色の種類別¹⁵

出現頻度には、色による大きなアンバランスがある。白が多く、茶色はその 20 分の 1 の出現頻度である。また、「白い」が圧倒的に多く出現し(1162 件：全体の 40%)、「青の」が最も少ない (8 件)。形容詞と名詞の割合を比べると、形容詞は名詞よりもはるかに高頻度で出現する。特に、白、赤、青では、名詞の出現はそれぞれ 3.6%、2.5%、3.3%と例外的である。茶色だけは傾向が異なり、「茶色の」は「茶色い」よりも多数出現している (77% vs 23%)。

図 2 は図 1 と同じデータを、文学と新聞に分けて表わしたものである。文学データにも新聞データにも全く同じ傾向を認めることができ¹⁶、この傾向は一般化のできる可能性があると考えられる。

¹⁴ 色の種類・コーパスの違いに基づく、色彩形容詞と色彩名詞の出現頻度の実数は、APPENDIX 3 の表に示した。

¹⁵ グラフでは、形容詞を「い」、「色彩名詞+の」を「の」として表示した。以下、全てのグラフにおいて同様である。

¹⁶ 元データの規模は、文学データ：18.1MB、新聞データ：推定約 58.1MB である。1MB あたりの生起を、APPENDIX 2 においてグラフで示した。色彩を表わす表現は、文学作品に偏って高い頻度で出現する。

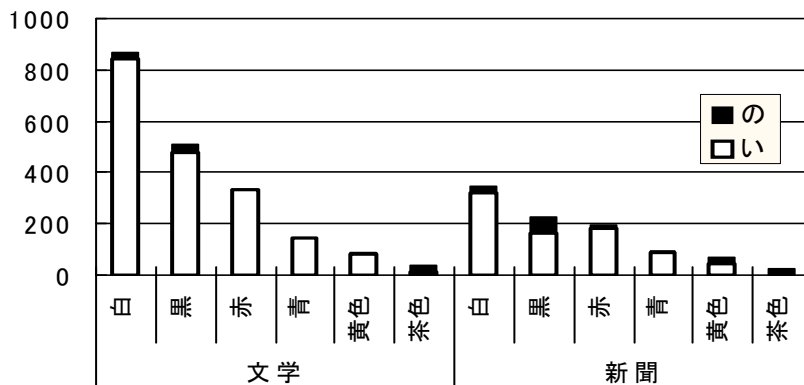


図2：文学・新聞データ，色の種類

3.5.2. 被修飾名詞の種類別の生起頻度

図3は色彩形容詞と色彩名詞の出現回数を，3.3.で定義した被修飾名詞の意味特徴別に分類して示したものである¹⁷。

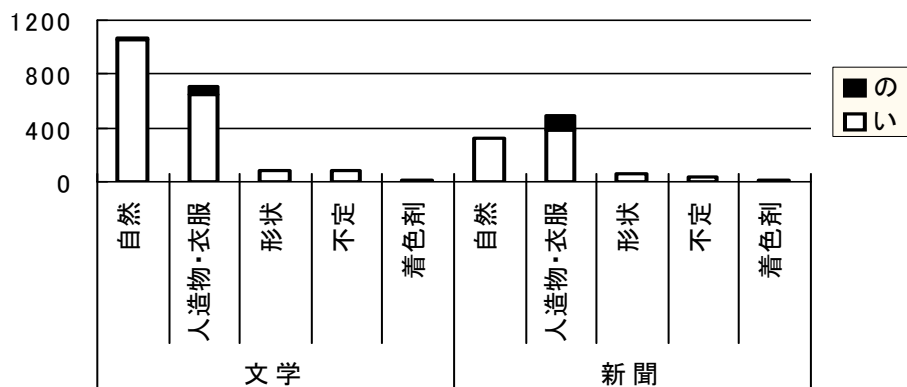


図3：被修飾名詞の意味特徴別

被修飾名詞は「自然」と「人造物・衣服」とが大部分を占め，それ以外は全てをあわせても1割程度である。被修飾名詞の出現傾向は文学データと新聞データで異なる。文学では「自然」が54%で「人造物・衣服」が36%と「自然」の占める割合が高いが，新聞では「自然」が35%で「人造物・衣服」が52%と後者の方が多い。「色彩名詞+の」が出現しやすいのは，新聞データの「人造物・衣服」においてであり，112件と最も多い。逆に「色

¹⁷ 被修飾名詞の意味特徴別の，色彩形容詞と色彩名詞の出現頻度の実数は，APPENDIX 3の表に示した。

彩名詞+の」の生起が最も少ないのは、文学データの「自然」と「不定」においてである。全体として「名詞+の」は、「人造物・衣服」を修飾する場合に用いられ、「自然」ではほとんど用いられていない。

4. 色彩名詞と色彩形容詞の対立：データからわかること

すでに述べたように本稿では、色彩名詞と色彩形容詞の対立を意味的な対立と考えている。一言で言うならば、「デジタル」対「アナログ」の対立だというのが本研究の仮説である。以下ではデータを観察することによって、この仮説の妥当性を検討する。

ここで「デジタル」、「アナログ」と呼ぶものは複数の独立した要因によって構成された複合的な概念である。また、「デジタル」と「アナログ」の間は、明確に2分できるようなものではなく連続した概念である。つまり、「デジタル度」・「アナログ度」とでもいうような概念である。このような考え方は、Givón (1979) や、Hopper & Thompson (1980) の他動性仮説などによって、言語学ではすでになじみ深い。我々は、名詞はいつも「デジタル的」で、形容詞はいつも「アナログ的」だと主張するわけではない。品詞と意味とは、直接の関係を結ぶわけではないからである。しかし、名詞と形容詞が対立の構造を作る場合には、品詞の対立に意味の対立が生まれ、その間に意味の差異を観察することができるようになる。

まずはこのような対立の構造が、色彩表現においていかなる風に成立しているかを見ることにしよう。

4.1. 対立の構造

色の種類が、名詞と形容詞の出現傾向にとっての重要な要因の一つであることは、図1・図2ですで見えた。「白」は形容詞として出現する傾向が強く、「茶色」は名詞として出現する傾向が強い。しかし、色の種類が他の要因よりつねに優先されるというわけではない。図3で見たように、被修飾名詞が無着色の「自然」なものなのか、それとも人工的に着色された「人造物・衣服」なのかの違いもまた重要な要因である。

図4は、この二つの要因を組み合わせたグラフである。グラフからは、色の種類と被修飾名詞の種類は、独立した別々の要因であり、どちらの要因も語形の選択に当たって、役割を果たしていることを読み取ることができる¹⁸。どの色についても、「自然」は形容詞と共起しやすく、「人造物・衣服」は「名詞+の」と共起しやすい。また、被修飾名詞が「自然」であろうと「人造物・衣服」であろうと、「茶色」はいつも名詞との共起傾向が強いし、「白・黒・赤・青」は形容詞との共起傾向が強い。「黄色」はいつもその中間にある。

¹⁸ 「白の雪」は不自然だが、「真っ白の雪」には問題がない。「真っ白の」は「真っ白な」と対立するが、「名詞+の」の許容度は高い。それぞれの対立に、それぞれの条件があるので話は複雑である。

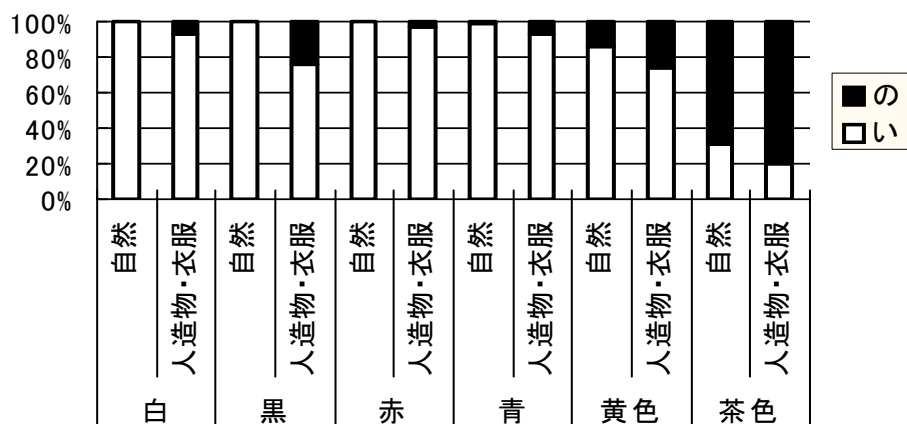


図4：色の種類と被修飾名詞の種類

ここで問題になるのは、色の種類の違いによるこのような制約を意味論で扱えるだろうかという点である。Berlin & Kay(1969)の「色」の含意的階層関係によれば、「黄色」は「青」に比べてより基本的な色のはずである。日本語において、「白・黒・赤」と共通した形態統語的特徴を共有するのが、「黄色」ではなく「青」であるということ、普遍を目指す意味論の枠組みで説明するのは難しい。むしろ、意味とは無関係の構造的な問題か、あるいは動機付けが言語の変化の中で失われてしまった歴史的な問題として扱った方がよいと思われる。「茶色」・「黄色」のように「-iro」で終わる色彩名詞が、形容詞語尾を伴って「茶色い」、「黄色い」となることは色彩表現の形態論として異例である¹⁹。この2つの「色」が形容詞として使用されるのは、他の4つの「色」ほど当たり前のことでないのである、形容詞としての出現が他の色より少ないのは、その意味で、当然と言えよう。しかし「黄色」と「茶色」の違いに関して、「茶色」はなぜ形容詞として出現しにくく、名詞として使用される例が「黄色」よりずっと多いのかなどは、説明がさらに困難である²⁰。ともあれ、図4の結果においてなにより面白いのは、この2色に関しても、「自然」は形容詞との共起傾向が強く、「人造物・衣服」は「名詞+の」との共起傾向が強いということであろう²¹。

4.2. 「色彩名詞+の」が「自然」を修飾する場合

色の種類と、被修飾名詞の種類は、確かに非常に重要な要因となるが、これ以外の要因がないわけではない。強い制約があるにも関わらず、「自然のもの」を修飾するために「白・

¹⁹ 赤い a-ka-i, 白い shi-ro-i, 黒い ku-ro-i, 青い a-o-i のように、茶色い chai-ro-i, 黄色い kii-ro-i も3拍に発音することが可能ということ、意味上、自然の中に数多く存在する色なので、形容詞との親和性があるということに理由がありそうである。

²⁰ ことによると、「黄色」と「茶色」の違いは、Berlin & Kay の含意的階層関係によって説明できるのかもしれない。

²¹ 「灰色い」や「緑い」も、絶対に使えないというわけではなさそうである。インターネット上では見つけることが難しくない。このようなイレギュラーな形容詞が使われ始めるとき、まず自然色を表わして用いられるのであれば、我々の仮説は正しいということになる。

黒・青・赤+の」が使用されることもあり、そのときには「名詞+の」の使用を促進する別の要因が関与しているに違いないからである。その例を、以下に挙げる。

白の（「自然」を修飾する「白い」と「白の」が 630 例あるうちの 2 例：0.3%にあたる）

- (7) 山にも冬山と夏山があり、その好みは、個人によって差があるといわれる。私は冬山は海に通じる気がするのである。白の世界と太陽光線の組み合わせが人を引きつけるのは、太陽がいっぱい的大海原の魅力に近いのではないかと思えるからである。（新聞）
- (8) 約 2 2 0 0 平方メートルの池には、紅色のアトラクション、白のアルバカンジマ、ピンク色のピグミライラシアが咲き競う。（新聞）

黒の（同じく 319 例中の 1 例：0.3%）

- (9) 「わたしにつづきたい者は、来い！」とだけ言い、黒のアラブ産の愛馬にまたがるや、騎首を北に向け駆け去った。（文学）

赤の（同じく 220 例中の 1 例：0.5%）

- (10) 真っ白なスノーグーズ、黄色のゴールデンセレブレーション、赤のザ・ダークレディ、ピンクのオールドピンクモスなど色彩豊かなイングリッシュローズを数多く見ることができる。（新聞）

青の（同じく 149 例中の 1 例：0.7%）

- (11) そのいでたちで金履輪の鞍をおいた青の肥馬²²にまたがり、沓掛城内を出ようとしたとき、不覚にも落馬した。（文学）

「白の・黒の・赤の・青の」が「自然のもの」を修飾することはきわめて稀である。例文 7-11 の被修飾名詞は確かに自然界に存在するものではあるが、馬や特殊な品種の花など、生き物であるとは言え、人間の手の加わった半ば人工的なものが目立つ。また、名詞は基本レベルのものではなく、詳細な情報の付け加わった品種名や、「愛馬」や「肥馬」などの複合名詞である。情報量の多い名詞と「色彩名詞+の」が共起しやすい問題については、不定名詞と対照させて後で再び触れる。

4.3 「黄色の」vs「黄色い」、 「茶色の」vs「茶色い」

「黄色の」と「茶色の」は自然界のものを描写して、問題のない場合が多い。例えば、自然の「葉」を描写する表現として、「青の葉」、「赤の葉」、「黒の葉」は不自然だが、「茶色の葉」、「黄色の葉」はごく普通である。この場合に「茶色の」と「茶色い」、「黄色の」と「黄色い」の間の意味の差はほとんどないと言えよう。

²² 青は、青毛「青色がかかった白色の毛」の意。アヲウマには、かつて「青馬」「白馬」の両方の漢字が当てられていた。現代語にはない用法なので、ここで用例とするのは不適切かもしれない。この例を除くならば、「青の」が「自然」を修飾する用例はゼロということになる。

茶色の葉	黄色の葉	*黒の葉	*赤の葉	*青の葉
茶色い葉	黄色い葉	黒い葉	赤い葉	青い葉

しかし、「茶色」と「黄色」にはいつも、同じ特徴があるわけではない。例えば、「目」の場合を考えよう。「茶色の目」は人間の目の色の描写として使用できるが、「黄色の目」は人間の自然な目の色とはいえないだろう²³。「茶色の」と「茶色い」の意味の差はほとんど無いのに対して、「黄色の」と「黄色い」の差は大きい。「目」を修飾する場合、「茶色」と「黄色」は、異なった振舞い方をすることになる。

茶色の目	?黄色の目	*黒の目	*赤の目	*青の目
茶色い目	黄色い目	黒い目	赤い目	青い目

他方、「黄色い」と「黄色の」の間、「茶色い」と「茶色の」の間に、類似した意味の差異があらわれることもある。例文 12 と 13 において、形容詞は、自然な変化の中で「黄色っぽくなった歯」や「茶色っぽくなった歯」をあらわすが、「名詞+の」が用いられると、折り紙の色のように均一な、自然界には絶対に存在し得ない歯の色が想起される。

(12) 頼圀は黄色い歯を出して笑った。(黄色くなった歯：文学データより)

頼圀は*黄色の歯を出して笑った。(黄色くなった歯ではない、ポケットから人工の歯を出したような印象?)

(13) 頼圀は茶色い歯を出して笑った。(茶色く汚れた歯)

頼圀は*茶色の歯を出して笑った。(茶色くなった歯ではない)

*茶色の歯	*黄色の歯	*白の歯
茶色い歯	黄色い歯	白い歯

以下には、「自然」をあらわす「黄色の」、「茶色の」、「茶色い」の実例を挙げる。

黄色の（「自然」を修飾する「黄色の」と「黄色い」が 63 例あるうちの 9 例: 15%）

(14) アカシアの木陰の涼しさや、黄色のウリの甘味を思い描いて、

(15) すっかり若草色になった地面には、黄色の可愛いタンポポが青空の中で

(16) すでにおしかくそうとさえしないで、黄色の歯茎を剥いた中年の警官は

(17) 船の横っ腹から流れだす黄色の排泄物を、大きな魚が群が

(18) へ下りて行った。黒人兵は縁に黄色の脂が厚くたまった眼で僕ら（以上文学）

²³ 絵の具の「茶色」に近い目の色をした人間はいるので「茶色の目」と言えるが、絵の具の「黄色」のような目の人は存在しないので、「黄色の目」とは言えないという説明も可能かもしれないが、いくら絵の具の「青色」に近い空の色であっても、自然の空は「青の空」とはいえないし、同じく、「赤の血」ともいえない。

- (19)「中輪白花のアイス・バーグ、黄色のサンフレーア、フリージアの3
 (20)なかなか気紛れとみえる。足元に黄色の実が落ちていたので実を食べ
 (21)関東では珍しい黄色の八重桜のもと、中村さんは
 (22)赤紫色の苞（ほう）の中に、黄色の花をつける姿が、（以上新聞）

茶色の（同 16 例中の 11 例: 69%）

- (23)だが私には、今まで見なかった茶色の世界がみえる。
 (24)い寺が見える。うしろは、崖の茶色の切りたつた山につづいている。
 (25)重松は箱膳の前に坐って、茶色の液体が入っているボテボテ茶
 (26)いたのであろうか、あさい茶わんに茶色の水が、なかばひからびていた。
 (27)の水面には、べとつく油のような茶色の泡が溜っていた。
 (28)紅葉しているのではなく、常緑樹や茶色の葉や、銀杏に似た金色の葉
 (29)七輪がのせられ、その上に金網と茶色の大きな木の葉がのせられた。
 (30)と申し訳なさそうに謝った。茶色の髪にいかにも奥様風のパーマ
 (31)に発生しておりましてね。小さな茶色の蟋蟀ですが、うさぎ蟋蟀と（以上文学）
 (32)空港に降り立つと、荒涼とした茶色の大地が目の前に広がる。
 (33) 扉を開けると、山桜の枝には茶色の小さい葉っぱがたくさんついて（以上新聞）

茶色い(同 16 例中の 5 例: 31%)

- (34) クチナシは特に。香り高くまばゆい白が若葉に映える。と思ったら、もう枯れた花が混在、茶色い姿をさらしている。
 (35) ひなのは考えた。「大人は、自分からみてこどもであるものが、意志をもってたらいけないの」。茶色い髪もピアスも、自分の意志であり自己主張だとひなのは思う訳だ。（以上新聞）
 (36) 「モーツァルト」は、避暑地でよく見かけるようなペンション風の造りで、外観も店内も茶色い木肌の美しさを強調して、まるで山小屋が一軒ぽつんと建っている、そんなふうな喫茶店でした。
 (37) 「それだよ」眼を丸くして七瀬に向きなおったグラブの学生の頭の中に、茶色っぽいものが炸裂し、砲煙のようなものが拡がった。「音もせず、ただ、こなごなになってとび散ったんだ」「茶色い煙が立ったと思ったよな」
 (38) ドミグラス・ソースは、これは、アメリカのH社のものに限った。太郎は自分でも何度か作ろうとしてみたのだが、とうてい手ばかりかかって効果が少ないので、今はもっぱら缶詰の中から、茶色いこってりしたソースを出して、こちょこちょと、何だかカンニングをしているような気分で加えることにしている。（以上文学）

「茶色の」と「茶色い」の例を比べると、「茶色の」には、厳密で均一な色のニュアンスが感じられることが多い。一方、「茶色い」には、不明瞭で不均一な色のニュアンスがあることが多いといつてよいだろう。

4.4. ジャンルの違い

次に図5は、文学作品か、新聞かというジャンルの違いに注目して、形容詞と名詞の出現傾向の違いを示したものである。どの色も、文学データでは形容詞として出現しやすく、新聞データでは名詞として出現しやすい傾向が明らかである。文学と新聞では、その言語行為の目的が異なり、取り扱う情報の質が異なるためであろうと考えられる。

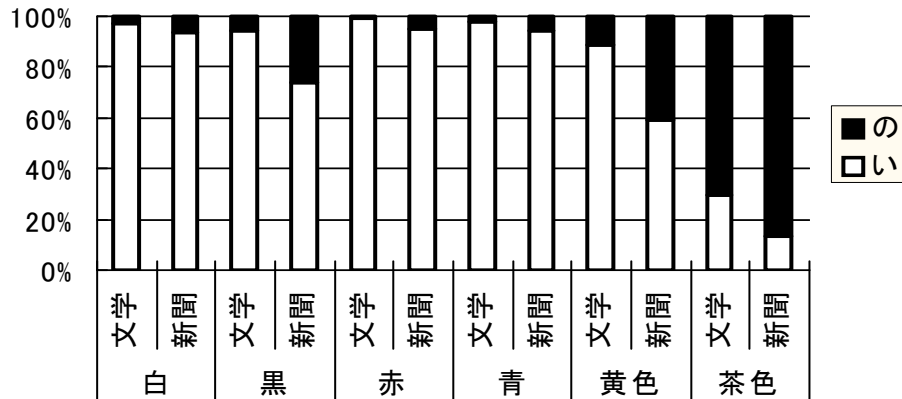


図5：ジャンルと色の種類

新聞の第一の目的は正確な情報伝達である。次に挙げる例は、新聞に現れる色彩表現として典型的なものである。表現は論理的・知的であり、必要十分な情報だけが伝えられている。事実を感情を交えずに理性的に伝える性向と、名詞出現の傾向の強いこととの関連性は明らかだと思われる。

- (39) 義弟は恵美子さんの現在の夫の弟。恵美子さんは数年前、現場近くに転居してきたという。逃走した黒のスカイラインのナンバーなどから義弟と分かり、警察は150人態勢で行方を追っている。
- (40) 届け出を受けた県警温泉津署の調べでは、成人男性で頭部はほぼ白骨化。着衣の雨がっぱ上下と茶色の作業服、黒の長靴、黄色のゴム手袋にハンゲルが書かれていた。
- (41) 湿地や谷川などで咲くサトイモ科の多年草。赤紫色の苞（ほう）の中に、黄色の花をつける姿が、僧りよがお堂の中で座禅をしているように見えることから名付けられた。今はまだ7～8センチ程度だが、高さは約20センチになる。

「黒のズボン」の代わりに「黒いズボン」が新聞で使われていれば、ズボンの色は「黒」ではなく、「黒っぽい色」だと考えられよう。

- (42) 真須美被告は、はにかむような表情を浮かべていたが、余裕もうかがえた。健治被告は、白のセーターに黒いズボン姿で入廷した。

一方、文学作品は、読者の感性と想像力に訴えかけて、読者のうちに豊かなイメージの世界を構築させ、芸術的な共感を抱かせることが目的である。色彩表現は、読者が物語を視覚化するために役立つので多用されるが、必ずしも正確な情報が求められているわけではない。新聞と比べて、形容詞の出現の傾向が強いのは理解できるだろう。

以下は文学作品における例である。

- (43) 信号が青にかわると、私の車の前のトラックがもたもたしているあいだに、白いスカイラインは派手な排気音を立ててカー・ステレオのデュラン・デュランとともに私の視野から消えてしまった。
- (44) ソファの底が抜けているのかと思って、よく見ると、なんと、ソファが上等すぎ、ふわふわしすぎているのであった。
そこへ、蝶ネクタイをし、白いコック帽をかぶり、白いシャツに、白い上衣、白いズボンに黒い長靴——というスタイルのコックが、ワゴンを押してやってきて、丁重にきいた。
- (45) 暖冬異変のせいか、春ひらく花が前年の暮に狂い咲きしたのがあった。連翹がそうで、玄関わきの竹垣の前で黄色い花がいくつか開いた。それは年があけてからも咲いていたが、ある寒い朝、澄江が夫を送りだしながら、まだ咲いているかしら、と竹垣の方を見たら、花は枯れていた。

新聞の中に現れる色は、色を指定することによって名詞のあらゆるものの情報量を増加させ、精密な伝達に寄与することが多いが、文学作品における「色」は、情景の情緒的な描写に貢献することが多い。形容詞と「名詞+の」の対立と、ジャンルとが相関する理由は、色彩表現のこのような機能の違いに求めることができると考えられる。

4.5. 被修飾名詞の種類：不定名詞と着色剤

図6は「白・黒・赤・青」の4色だけを対象に、再び、被修飾名詞の種類別に形容詞と名詞の出現高次を示したものである。以下では、「不定名詞」と「着色剤」に関して考察する。

4.5.1 不定名詞

不定名詞とは、「もの」、「の」、「かたまり」、「玉」、「部分」、「やつ」、「物」などである。つまり、それが何なのかが示されていない「もの」であり、情報量が非常に小さい名詞である。このような名詞が色彩表現によって修飾されるとき、「白・黒・赤・青+の」が現れる傾向はきわめて弱い。不定名詞が「白・黒・赤・青+の」によって修飾されている例は、新聞データでは33例の中に1例も存在しないし、文学データにおいても、86例中1例あるだけである。ぼんやりとした曖昧なものに対しては、ぼんやりとした色彩表現が用いられるということらしい。例文46から49はその例である。例文50は不定名詞のうちで唯一「名詞+の」が選択されている例である。名詞は「部分」であり、「白の部分」は「白ではない部分」と対比されて輪郭が際立つ。もはや、ぼんやりとしたものではないために「名

詞+の」の使用は自然だと感じられる²⁴。しかし、これ以外の他の例では、色彩形容詞を「名詞+の」で置き換えることは困難である。

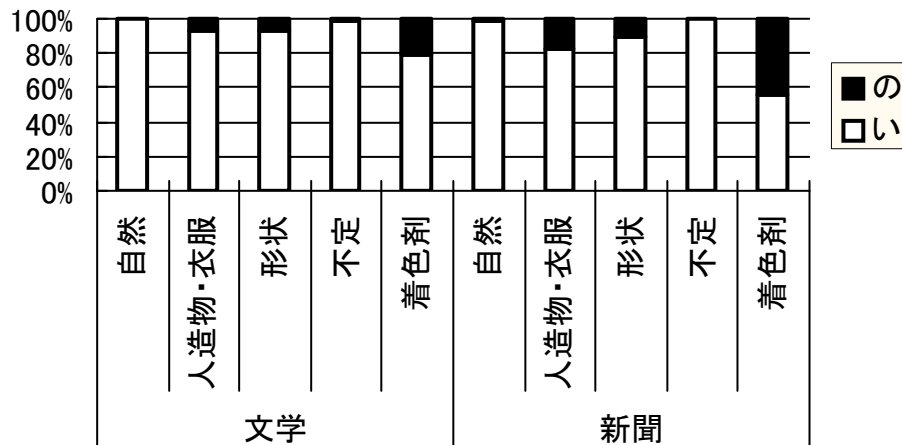


図 6：被修飾名詞の意味特徴（白，黒，赤，青のみ）

不定名詞の例：

- (46) 吉田長官と反対に参謀長の高橋少将は大酒飲みで、葱の白いのが好物で、コックに命じて生葱に味噌を出させて始終酒を飲んでいる。(文学)
- (47) トランクスと同じ美しいサーモンピンクで、背に「カシアス」と英語で刺繍がしてある。
「いいじゃないか」私が言うと、内藤は笑った。
「同じ色のがなくてね。だから、これも白いのを買って染めたんだ」(文学)
- (48) 本来は、バレンタインデーのお返しに1カ月後の3月14日、男性から女性に白いものを贈る日をホワイトデーというそうです。(新聞)
- (49) しかし、五年前会った時にはまだ残っていた髪の黒い部分が、今ではすっかり白くなり、しかも驚くほど薄くなっていた。(文学)
- (50) 人の住まぬ金閣は、究竟頂と潮音洞の二つの屋根、これに更に漱清の小屋根を加えて三つの、くっきりした白の部分のほかは、暗い複雑な木組が、雪中にむしろなまなましい黒色をうかべていたが、われわれが南面の山中の楼閣などに、ふと人が住んでいはいはしないかと、画面に顔を近づけて覗いたりするように、その古い黒い木の色のあでやかさは、金閣に誰か人が住んでいるのではないかと、窺いたくなる気持に私をさせた。(文学)

「不定名詞」とは反対に、品種名や製品名など情報量の高い名詞を修飾する場合に、「名詞+の」が出現しやすくなることはすでに述べた。例えば自動車に関して、「車」や「乗用車」

²⁴ 「部分」を不定名詞の範疇に分類してよいのかどうかという問題も残る。

などの情報量の高くない名詞を修飾する「名詞＋の」の用例はコーパスの中に一例もないが、「黒のスカイライン」、「白のペンツ」、「黒のプレジデント」などは存在する。「名詞＋の」が自然界に存在するものを修飾する珍しい例に、「赤のザ・ダークレディ」、「白のアルバカンジマ」、「黄色のサンフレア」など品種名が目立つことはすでに見たとおりである²⁵。

4.5.2. 着色剤

続いて被修飾名詞が「着色剤」である場合を検討する。「着色剤」というのは、「ボールペン」、「インキ」、「色素」、「スプレー」、「ペンキ」などをいう。このタイプの被修飾名詞が他のタイプと異なるのは、色彩表現の役割が「着色剤」の外見の記述ではなく²⁶、「生産物」としての「色」と「生産者」としての「着色剤」との論理的な関係の表示であるという点である²⁷。新聞においては、被修飾名詞が「着色剤」の場合には、「名詞＋の」が40%以上の高率で用いられている。文学作品においても、20%以上が名詞である。

着色剤の例：

- (51) いくつか、見込みのありそうな所を、赤のボールペンで四角く囲んで、更に検討する。
(文学)
- (52) NTT番号情報は、2000年以降に発行する職業別電話帳「タウンページ」に白色の紙を使用する。これまでは紙を黄色の染料で着色していたが、脱色などが困難でリサイクルに適さなかった。(新聞)
- (53) この2年の男子生徒以外は、学校が準備した黒の髪染めスプレーで染め直すなどしたため、出席を認めた。(新聞)

名詞は論理的な関係との親和性が強く、形容詞は描写性との親和性が強いということは、すでに何度か述べたとおりである。

4.6. 黒

最後に「黒」について考察する。図7は、新聞データの中の「自然」と「人造物・衣服」を表す場合のみに範囲を限って、「白・黒・赤・青」の出現傾向を表したものである。「人造物・衣服」を修飾して用いられる場合に、「黒の」が突出した高い頻度で出現することに気が付く。

²⁵ どれも、バラの品種名。

²⁶ 外見の記述も同時に行うことが多い。

²⁷ 奥津(1993)は、「自由の女神」と「自由な女神」の対立を扱い、論理的関係と記述的關係の対立であると説明しているが、奥津はこれを品詞の対立とは考えない。

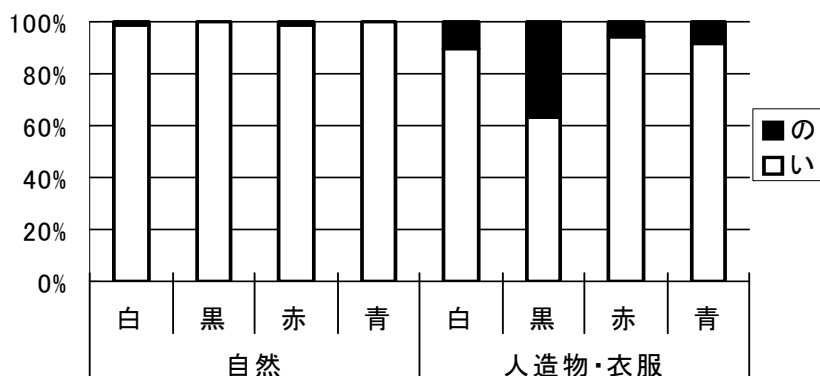


図7：着色/無着色と色の種類（新聞データのみ）

まず、なぜ「人造物・衣服」を修飾する場合のみに、「黒の」が高い出現傾向を示すのかという問題を考える必要があるだろう。色彩表現の出現のパターンは、「自然」を修飾する場合と、「人造物・衣服」を修飾する場合とで全く異なる。この事実は、色には「自然色」と「人工色」の二つの違ったシステムを想定するべきではないかということを示唆している。色彩表現に関する議論では、その説明原理を自然界に求めようとすることが多いが²⁸、人工的着色のための染料は、色彩表現の成立に重要な役割を果たしてきたらしい²⁹。また、日本語の色彩表現の発達の上で、衣服の色は極めて重要であったようである³⁰。

図8は、衣服を修飾する色彩表現のみ(全 524 例)を対象にしたグラフである。新聞データでは、衣服を修飾する「黒」の半数は「黒の」であり(96 例中の 49, 5%)、他の色とは大きなコントラストを見せている。文学作品においても、「黒」は他の色と比べて名詞のあらわれる頻度が高く(92 例中の 25,37%)、衣服の色に関して文学作品と新聞は同じパターンを示していると言えよう。「黒」と「白・黒・赤」との間の差異に関しては、黒という色は焦点性が強く、指示対象が一元的に決まりやすいのに対して、「白・赤・青」は、指示の範囲が広くて、指示対象が定まりにくいという説明が可能であろう。ただし、このような「黒」の特徴は、人工的な「黒」、すなわち染色による「黒」にのみ当てはまる性質であって、自然界に存在する「黒」に関するものではない³¹。例えば、例文 54 の「黒のトレンチコート」では、「黒」がどんな色を指示するのかについて、書き手と読み手の間にコミュニケーション上の齟齬が発生しないことを確信できる。一方、例文 55 の「青のスプリングコート」の場合には、コートの色がどんな色なのか不明である。

²⁸ 例えは Wierzbicka(1996)。

²⁹ 基本的な 4 色の語源にも定説があるわけではない。あか(明), くろ(暗), あお(漠), しろ(顕)に由来するという、佐竹(1950)の説がよく引用されるが、大野(1979)は、少なくとも、あか, くろ, あおは、染料の色が語源ではないかという説を提示している。また、このように考えれば、「衣服や人造物」、「着色」、「無着色」といった、言語学における意味素性としては場違いな感じのするタームが、色彩表現を考える上で必要不可欠なキーワードとなる理由が納得できるであろう。

³⁰ cf. 井原昭(1988)

³¹ つまり、「黒」のメタファーは、必ずしも自然界のメタファーではないはずである。

(54)事件の際、容疑者が黒のトレンチコートを着て銃を乱射した事実が、すぐにある映画を思い起こさせた。

(55)伊達邦彦は明るい微笑を浮かべた。茶色のソフトをかぶり、青のspringコート姿でハンドルを握る。(新聞)

「青の」という表現は、指示対象の同定についての高い確信のモダリティを示す。色の同定はまるで当たり前の前提のようであるが、読み手はそれを同定することができず落ち着かない。「青」のように焦点性の弱い色の場合には、「青いspringコート」と曖昧に表現する方が好まれ、「名詞+の」の頻度は低くなるわけである。

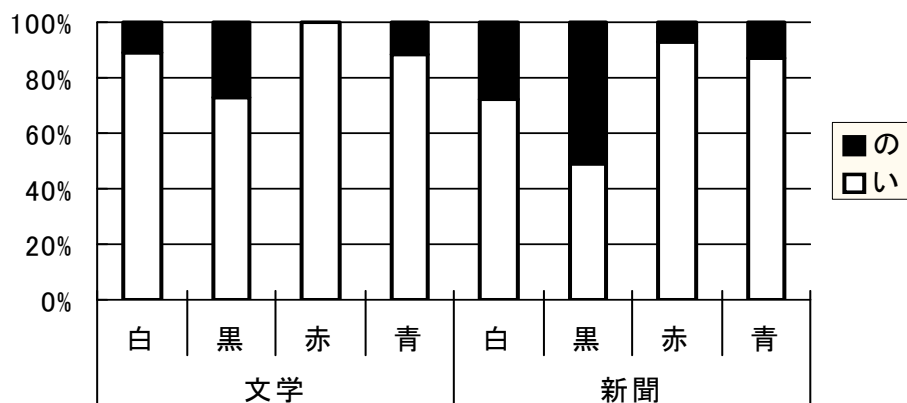


図8：「衣服」を修飾する場合の形容詞と名詞の交替

5. まとめ

本稿では、従来の研究の中で、十分には取り扱われてこなかった色彩形容詞と色彩名詞の対立を、大規模コーパスを用いて研究した結果の一部を報告した。冒頭で掲げた、色彩形容詞は「アナログ的」、色彩名詞は「デジタル的」という仮説の妥当性はある程度、見通せたと思う。本稿の議論の中で、「色彩形容詞」の特徴と「色彩名詞+の」の特徴として言及したキーワードを、色の種類、ジャンル・意図、指示対象、機能に分類してまとめたのが表1である。これらのキーワードのそれぞれが、「アナログ」という概念、「デジタル」という概念を構成する要因であると考えられる（ただし、色の種類に関する要因のうちいくつかを除く）。表1の左側の列にある要因が多いほど、色彩形容詞が出現する可能性は高くなり、逆に、右側の要因が多いほど「色彩名詞+の」が出現するはずである。沢田(1992)が挙げた、指定や描写というキーワードも、この枠組みにおいて場所を得ることができたと思われる。

	色彩形容詞	色彩名詞十の
色の種類	基本色名 ³²	慣用色名
	民衆分類	科学分類
	白・赤・青（焦点が曖昧）	黒（焦点が明確）
	黄色	茶色
ジャンル・意図	共感・情緒	情報伝達
	イメージ	論理
	文学	新聞
指示対象	自然	人工着色
	立体	平面
	動	静
	複雑	均一
	自然	人工着色
	文脈ごとに指示対象の色が変化	色票（染料）を指示するので指示対象が安定
	恣意的	動機付けがある
機能	描写	弁別・対比
	曖昧	正確・明確
	大雑把な情報	詳細情報
	「どんな？」	「どの？」
	色のパラダイムを作らない	色のパラダイムを作り、その中の一つを指定
まとめ	アナログ的	デジタル的

表 1：色彩名詞と色彩形容詞の対立に関する要因

本稿の結果は、方法として用いた大規模コーパスの検索に多くを負っている。直感や、少数の用例によって、色について語るのは困難である。もしもそのために研究があまり進んでいなかったのだとすれば、コーパスを利用することによって今後行うべき仕事は、たくさん残っているといえるだろう。

³² 言語学は、「しろ・くろ・あか・あお」を基本色名とする。色彩学では、赤、黄赤、黄、黄緑、緑、青緑、青、青紫、紫、赤紫、白、黒、灰色の13種が、基本色名と定められているらしい。

【参考文献】

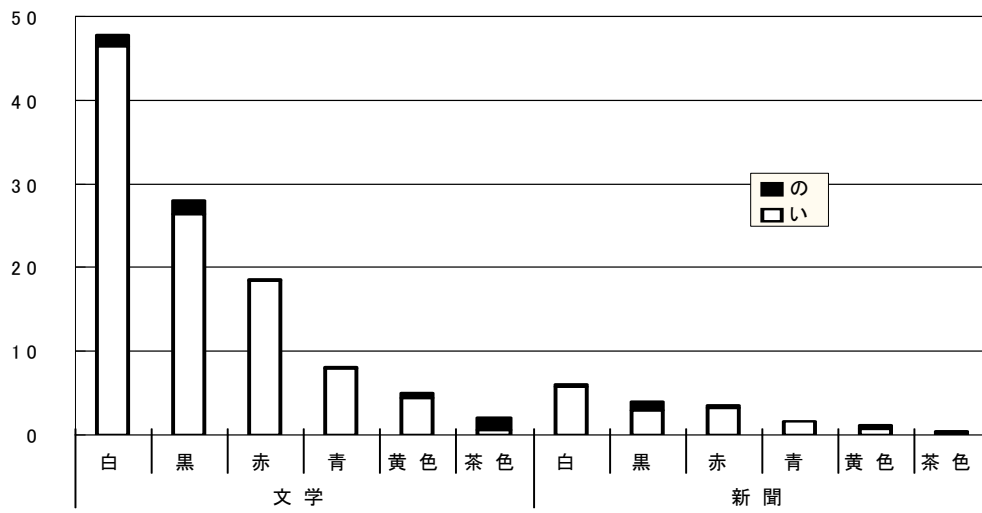
- Berlin&Kay (1969): *Basic Color Terms -Their Universality and Evolution*, Univ. of California Press
- Givón, T. (1979): *On Understanding Grammar*, Academic Press.
- Hopper P. & S. Thompson (1980): "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language*56-2, p.251-299.
- Langacker, R. W., (1987): *Foundations of Cognitive Grammar, Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- Mollard-Desfour Anne (1996) : *Le dictionnaire des mots et expressions de couleur Le Bleu*, CNRS Editions
- Mollard-Desfour Anne (2000) : *Le dictionnaire des mots et expressions de couleur Le Rouge*, CNRS Editions
- Mollard-Desfour Anne (2002) : *Le dictionnaire des mots et expressions de couleur Le Rose*, CNRS Editions
- Wierzbicka, A. (1996): *Semantics : Primes and Universals*, Oxford University Press.
- 井原昭 (1988), 「日本文学と色彩語」『日本語学』vol7-1, p.32-40
- ヴィトゲンシュタイン, L. (1997), 『色彩について』, 中村昇, 瀬島貞徳訳, 新書館
- 大野晋(1979), 「日本語の色名の起源について」, 『朝日選書 139:日本の色』(大岡信編), 朝日新聞社, p.193-99.
- 奥津敬一郎(1993), 『「ボクハウナギダ」の文法ーダとノー』第8版, くろしお出版
- 国立国語研究所(1972), 『形容詞の意味・用法の記述的研究』, 秀英出版
- 坂原茂(1990), 「役割, ガ・ハ, ウナギ文」, 『認知科学の発展, vol3 特集メンタル・スペース』日本認知学会編, p.29-66.
- 佐竹明広(1950), 「古代日本語に於ける色名の性格」, 『国語国文』19-10.
- 沢田奈保子(1992), 「名詞の指定性と形容詞の限定性, 描写性についてー色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析からー」『言語研究』102, p.1-16.
- 柴田武 (1988), 「色名の語彙システム」, 『日本語学』vol7-1, p.18-22.
- 鈴木孝夫 (1990), 『日本語と外国語』, 岩波書店
- テイラー、ジョン・R (1996), 『認知言語学のための14章』、紀伊国屋書店

APPENDIX 1 : 文学データの内訳

阿部公房『砂の女』, 阿川弘之『山本五十六』, 赤川次郎『女社長に乾杯』, 有吉佐和子『華岡青洲の妻』, 遠藤周作『沈黙』, 藤原正彦『若き数学者のアメリカ』, 福永武『草の花』, 星新一『人民は弱し官吏は強し』, 井伏鱒二『黒い雨』, 池波正太郎『剣客商売』, 井上ひさし『ブンとフン』, 井上靖『あすなろ物語』, 石川淳『焼跡のイエス・少女懐胎』, 石川達三『青春の蹉跎』, 五木寛之『風に吹かれて』, 開高健『パニック・裸の王様』, 北杜夫『楡家の人びと』, 倉橋由美子『聖少女』, 松本清張『点と線』, 水上勉『雁の寺・越前竹人形』, 三島由紀夫『金閣寺』, 三浦綾子『塩狩峠』, 三浦哲郎『忍ぶ川』, 宮本輝『錦繡』, 村上春樹『世界の終りとハードボイルドワンダーランド』, 新田次郎『孤高の人』, 野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』, 大江健三郎『死者の奢り・飼育』, 大岡昇平『野火』, 沢木耕太郎『一瞬の夏』, 司馬遼太郎『国盗り物語』, 椎名誠『新橋烏森口青春篇』, 塩野七生『コ

ンスタンティノーブルの陥落』, 曾野綾子『太郎物語』, 立原正秋『冬の旅』, 高野悦子『二十歳の原点』, 壺井栄『二十四の瞳』, 筒井康隆『エディプスの恋人』, 山本周五郎『さぶ』, 吉村昭『戦艦武蔵』, 吉行淳之介『砂の上の植物群』, 渡辺淳一『花埋み』

APPENDIX 2: 文学と新聞のデータ 1MB 当たりの生起 (約)



APPENDIX 3: データの概要 (実数)

		い	の	総計
文学	白	840	23	863
	黒	477	30	507
	赤	330	3	333
	青	143	3	146
	黄色	81	10	91
	茶色	11	26	37
	文学計	1882	95	1977
新聞	白	322	21	343
	黒	166	59	225
	赤	183	10	193
	青	88	5	93
	黄色	41	28	69
	茶色	3	20	23
	新聞計	803	143	946
総計	2685	238	2923	

		い	の	総計
文学	自然	1053	18	1071
	人造物・衣服	647	66	713
	形状	83	7	90
	不定	88	1	89
	着色剤	11	3	14
	文学計	1882	95	1977
新聞	自然	321	9	330
	人造物・衣服	383	112	495
	形状	56	9	65
	不定	33	5	38
	着色剤	10	8	18
	新聞計	803	143	946
総計	2685	238	2923	